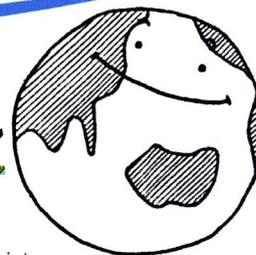


RIICC Newsletter



Osaka Jogakuin (Wilmina) University
Research Institute of International Collaboration and Coexistence

大阪女学院大学 国際共生研究所 <http://www.wilmina.ac.jp/ojc/edu/RIICC>
540-0004 大阪市中央区玉造2-26-54 e-mail: riicc@wilmina.ac.jp

November 15, 2011

- ・巻頭エッセー「なぜ教科学習に母語が大切か」..... 1
- ・研究所プロジェクト活動・最近の研究活動紹介
- 国際共生研究所シンポジウム 2-3
公正で平和な世界へー国際共生の意義と役割ー
- Project 1 春と秋の講演会/ワークショップ企画報告 2-3
- 平和・人権研究会開催報告 3
- ・連載シリーズ4「世界の潮流：核兵器のない世界」..... 4
- ・書籍紹介『初年次教育：歴史・理論・実践と世界の動向』..... 4

なぜ教科学習に母語が大切か

加藤 映子

日本の小・中・高等学校に在籍する日本語指導が必要な外国人児童生徒数は、現在は横ばいであるがこれまで増加傾向であった。平成22年9月の文部科学省の調査では28,511人（平成20年9月調査より0.2%減少）である。これらの児童生徒の母語は、ポルトガル語（9,477人）が最も多く、次いで中国語（6,154人）、フィリピン語（4,350人）、スペイン語（3,547人）…の順となっている。さて、こうした外国人児童に日本語の指導を行う際には、日本語指導と教科内容を組み合わせた教材を作成したり、トピックをベースとする日本語教育と教科学習を組み合わせたJSLカリキュラムを実施したりしている。このような指導法を採用するようになったのは、日本語という言語の教育が優先的に行われた弊害として、会話やコミュニケーションが可能になっても、教科学習についていけない子どもが生まれたからである。また、学校は言語だけでなく、理科、社会、算数といった教科を学習するところである。そのため、日本語指導と教科内容を組み合わせたカリキュラムが採用されるようになった。家族関係、アイデンティティ、認知力の発達において母語の果たす役割は大きい。ここでは、教科学習における母語の重要性について考えてみたい。

Cummins (1980, 2000) は学習に必要な言語能力をCALP (Cognitive Academic Language Proficiency) と呼び、日常会話などコミュニケーションをはかる言語能力をBICS (Basic Interpersonal Communication Skills) として区別した。話し言葉を使える（＝日常会話ができる）ことと、第二言語で教科の学習ができることとは、異なる言語能力が要求される。BICSで行うクラスメートとの会話には場面依存性がある場合が多く、ジュスチャーを交えてコミュニケーションをとることも可能である。反対に、CALPを使用する環境は未知の知識や概念を理解するための高い認知力を要求し、抽象度も高い。これに加えて、日本語を母語としない児童生徒にとっては、日本語彙の欠如や、自国で受けた教育と日本で受ける教育との継続性に断絶があること、さらに、母語での知識や語彙の不足ということも、教科学習を困難にする要因となっている。

CALPは自然に身に付くものではなく、学習の中で会得されるものと考えべきである。そして、言語を学ぶ授業の中に当該学年に応じた教科学習の内容を入れることによって、学習者の知的好奇心を刺激することも可能となる。CALPには、授業がわかる、発言ができるというオーラル能力だけでなく、読んだり、書いたりする言語能力が必須である。また、その能力を育成する上で、母語が助けとなると考えられている。これに関してCummins (1989) は、言語の相互依存説 (interdependence principle) に基づき、「第一言語（母語）の発達と第二言語の発達は相互に依存し、母語による学力向上を行いながら第二言語を習得することは、学習者の言語能力全体を伸ばす」と主張している。つまり、母語による言語の基礎があると、第二言語の習得が容易になるということである。

話し言葉は理解できても、文章を読み、理解していくことは大変難しい。そのため、アメリカでは、移民の子どもたちに英語の読む能力をどう教えるべきかに関する提言も行われている (National Research Council, 1998)。英語習熟度は不十分だが母語が発達している場合、指導書と学習教材、そしてそのような子どもたちを指導可能な教師が揃っているのであれば、まず母語での読みを教える。それと並行して英語の言語能力をあげ、母語での読みの能力をつけさせた後に英語での読みを指導するという手順が提案されている。

母語を用いて指導ができる体制を築くことが、外国人児童生徒を多くかかえる日本の学校の課題といえる。

参考文献・資料

- Cummins, J. (1980). *The exit and entry fallacy of bilingual education*. NABE Journal, 4 (3), 25-29.
- Cummins, J. (1989). *Empowering minority students*, Sacramento: California Association for Bilingual Education
- Cummins, J. (2000). *Language, power, and pedagogy*. Buffalo, NY: Multilingual Matters.
- National Research Council (1998). *Preventing reading difficulties in young children*. C.E. Snow, M.S. Burns, & P. Griffin (eds). Washington, DC: National Academy Press.
- 文部科学省 (2011). 『「日本語指導が必要な外国人児童生徒の受入れ状況等に関する調査 (平成22年度)」の結果について』 http://www.next.go.jp/b.menu/houdou/23/08/_icsFiles/afeldfile/2011/08/16/1309275.pdf